２００４（平成１６年）１１月号

カルメル

霊性センターニュース

１１月号

No. 193

「あの人はどこに逝ったの？」

カルメル会　中川 博道

小学校２年生の時の思い出です。学校の映画鑑賞で、広島の原爆記録映画を見たときのことです。ある建物の石の階段に座っていて被爆した人の影が残っている写真が紹介されました。その時、私の心に「一瞬のうちに、自分の影だけを残してこの世界から消えていったあの人はどこに逝ったのだろう？」という疑問がわきあがりました。その日から周りの大人たちに何度となく「あの人はどこに逝ったの？」と問いかけました。明確な答えを得ることもなく、いつしか、このような質問をすると、大人は顔を曇らせるという印象だけが残っていきました。しかし、私の中からこの問いは消えることがありませんでした。今から振り返ると、結局この答えを探して私は教会の門を叩く事になっていきました。そして「あの人」が、私を見えない世界へと導いてくれたように思います。

自分の人生に関わってくださった多くの亡くなった方たちは決して無くなったのではなく、今も自分の人生に深く関わって導いていてくれることを実感します。

人生があたかもこの世だけの出来事のように考えて、この世ですべての決着をつけなければと奔走する世俗主義的な世界にあって、死者を思うことは時空を越える真実の世界へと私たちを開いてくれるように思います。

「死者の月」、わたしたちの先人たちとの静かな対話の中で世界の真の拡がりを確かめる時を大切にしたいと思います。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。
わたしの父の家には住む所がたくさんある。
もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。
行ってあなたがたのために場所を用意したら、
戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。
こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」（ヨハネ１４章１～３）

心　の　泉

跣足カルメル在俗者会の会憲（３）

序　言　（1）

チプリアノ・ボンタッキョ神父

序言の冒頭に“すべての人は、愛において、神の唯一の聖性に召されている”と書いてあります。言葉に注目しましょう。“すべての人”と書いてあります。“すべてのキリスト者”と言っていません。ところが、教会憲章の第５章の表題は“教会における聖性への普遍的召命”となっています。どこが違うかというと、“教会における”というと、明らかにカトリック信者のことを指しています。カトリック信者は皆、修道者と聖職者だけではなく、信徒も聖性に召されているということを強調しています。カトリック信者ではない人々に関してはなにも言っていません。“教会憲章”だからそういう書き方をしてもしかたがないかもしれません。ところが会憲の序言には“すべての人”と書いてあります。カトリック信者あるいはキリスト者だけではなく、すべての人が聖性に召されていることが言われています。確かにすべての人が“神の似姿”（創世の書 1,26-27参照）として造られているので、神の唯一の聖性に与かるように呼ばれていることはまちがいないと思います。

尚、十字架の聖ヨハネは“聖性”とか“完徳”という用語よりも“神との一致”を選んでいます（カルメル山登攀要旨や前書きを参照）。この表現は前の二つと同じことを意味するが、霊的歩みの対神的側面を強調するものであり、また“関係理念”を明らかにしているので十字架の聖ヨハネはこの表現を選んでいると思われます。神との関わり方また隣人との関わり方、さらにすべての被造物との関わり方を正すことを通して、人はいわゆる“聖性”や“完徳”の道に前進し、“神の似姿”を次第に実現していくことは確かなことです。

さて、カルメル在俗者会の会憲の序言に戻ります。その４行目に“キリストに従うことは、洗礼がすべてのキリスト者に開いた完徳に達する道である”と書いてあります。それは、“見えない神の像”であるキリストは、父なる神と常に一致して、すべてなさることは神を現すものです。従ってキリスト者はキリストの内に自分たちの人間として与えられている召命の具現というものを見ることができます。従って、洗礼のときに、キリストに習うことを約束することをもって洗礼によって開かれた道を歩き出すというのです。

断想（１９６）

いっとき　足をとめて

生きることは　美しいこと
愛したいという　願いのあるかぎり
よし　愛することが　できなくとも
生きることは　重いこと
愛の深まるかぎり

ひとかけらの愛だけでも
神は
かぎりなく　喜ばれる

祈れないとき　せめて
坐りなさい
あとは自然に

聖書を読むことは
いっとき足をとめて
深く静かな呼吸をするようなもの
神の味がわかる

（奥村　一郎）

ヘンリ・ナーウェンの『旅路の糧』(71)

コンパッション（苦しみを共にすること・あわれみ）の権威

教会はしばしば私たちを傷つけます。宗教的権威を持った人々が、言葉や態度や要求によって、私たちを傷つけるのです。宗教はまさに生死の問題に触れるので、私たちの宗教的感受性は、いとも簡単に傷つくのです。聖職者や司祭は、彼らの批判的な言葉や拒否のしぐさやいらいらした態度が、それらを受け取る人々にとってどれほど生涯忘れられないものとなるかを、ほとんどよく理解していません。

人生の意味、慰めと安らぎ、赦しと和解、癒しと回復に対するとてつもない飢え渇きが存在します。それゆえ、教会において何らかの権威を持つ者は、絶えず思い起こすべきでしょう。宗教的権威を特徴づける最上の言葉は、**コンパッション**（苦しみを共にすること・あわれみ）であるということを。イエスに目を向け続けましょう。彼の権威は、コンパッションの中に表されているからです。

（１０２６）

教会を赦すこと

教会にずっと傷つけられてきた場合、私たちは教会を拒否しようという誘惑にさらされます。しかし教会を拒否するならば、生きているキリストと接触することがとても難しくなります。「私はイエスを愛するが、教会を憎む」と言う時、結局のところ、教会ばかりでなく、イエスをも失うことになるのです。教会を赦すということは、私たちへの挑戦です。この挑戦は、教会が滅多に、少なくともおおやけには私たちに赦しを求めないがゆえに、特に大きなものとなります。けれども、教会はしばしば過ちを犯す人間の組織・共同体であり、私たちの赦しを必要としているのです。しかしその一方で、教会は私たちの間に生きているキリストとして、私たちに赦しを与え続けてくれるのです。

教会を現実から離れた「あちらのもの」としてでなく、苦闘する弱い人々の共同体であると考えることは重要です。私たちはその部分であり、その中で私たちの主であり贖い主であるイエスに出会うのです。（１０２７）

九里（くのり）　彰訳

年間第３２主日

「復活の時、その女は誰の妻になるのでしょう」(ルカ２０：２７～３８)

イエスの時代の人々は死後の世界とか、魂の不滅をぼんやりと信じていたようですが、サドカイ派の人々は魂の死後の存続や報いなどを否定し、復活も信じていませんでした。彼らがイエスに論戦を挑みます。

旧約聖書には、レビラト婚というのがありました。兄弟が子供を残さずに死んだ場合、残された兄弟は死んだ兄弟の未亡人を妻とし、生まれた子供にその兄弟の名を継がせ、その名が絶えないようにするというものです(申命記２５：５～６)。さて一方で神は一夫一婦制を理想とし(創世記２：１８～２４)、複数の妻を持った人は旧約の時代を通して何人もいたものの、イエスの時代には一夫一婦制が普通になり、これも神の御旨だと考えられていました。

彼らは極端な例を出します。７人の兄弟がいてまず長男が結婚しましたが、子供がないまま死にました。レビラト婚に従って、次男そして三男と次々に同じ女性と結婚しましたが、皆子供をもうけないまま死んでしまいました。そしてこの女性も亡くなりました。さてもし復活があるとしたら、この女性は誰の妻になるのでしょうかとサドカイ派の人々は問います。７人ともこの女を妻にし、子供をもうけなかったのです。条件は皆同じです。だから重婚になるとしか考えられません。ところでこれは一夫一婦制をお望みになる神の意志に反します。神は矛盾したことをお命じにならないはずです。そこで復活はないと結論することができると彼らは主張するのです。

これに対してイエスは、復活するのに相応しいとされた人々はもはやめとることも嫁ぐこともない反論します。彼らの考えは根本的に間違っている。彼らは復活が今人間が持っている肉体、精神のまま生き返ることだと思っている。しかし実はそうではなく、復活した人はもう死ぬことがなくて、天使に等しいもの、神の子となっているから、今の地上の生活のような結婚はもうないのだと仰います。それはイスラエル人が父祖と仰ぐ人たちと同じだと説明します。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と神ご自身が言われたのは、彼ら太祖たちが神の懐で今も生きていることを現しているのであって、復活もこれと同様になると言いました。彼らは霊の体、栄光の体を持っています。透明な存在であり、神の栄光を反映する器となっていて、まさに天使と等しい者になっています。

ルカ福音書にはないのですが、マルコとマタイの並行個所でイエスは、「あなたたちは聖書も神の力も知らないからそんな思い違いをするのだ」と手厳しく批判なさっています。神の思いは人間の思いをはるかに超えています。聖書を読み、それを合理的に矛盾がないように解釈しても、神の超越性、神の偉大な力に対して恐れを持っていないなら、このサドカイ人たちのようにひどい間違いを犯してしまうかもしれません。

(新井)

年間第３３主日

迫害をのり越える忍耐

（ルカ２１：５－１９）

今日の福音でイエスは言います。「忍耐によってあなたがたそれぞれの命を得ることでしょう。」神だけがこの世の終わりを知っておられます。けれどもそれはわたしたちが安楽に生きることを意味するものではありません。いついかなるときに神から呼ばれても、自信を持って主なる神にまみえることができるように、この命は生きるべきなのです。忍耐こそが私たちに命をもたらすことを主は約束しておられます。忍耐は人間にとって欠くことのできない資質です。愛と真理において耐え忍ぶこと、それは私たちを永遠なるところへ伴います。

イエスが弟子たちにあれほどはっきりと迫害について語った後でも、大勢の人々がイエスにつき従ったのは驚くばかりのことです。イエスは迫害を予言しました。義のために迫害される人は幸せである、とさえ言いました。神は、教会を浄めるために迫害されるにまかされました。秋の木立を一掃する嵐によって葉は吹き落とされ、樹木は枯死したかに見えます。しかしひとたび春が訪れれば、枝のそこここに新芽は萌えいで、花が咲くことでしょう。それらのことが迫害においても起こります。多くの枯れた葉は落ちても、教会の命は再生しつづけるのです。

若い女性に二人の息子がいました。彼女は夫に捨てられ、この二年間寂しく暮らしていました。そのうちある男性と暮らし始めます。子供たちはすぐにその男性が信用できずに母親に意見しますが、母親は耳を傾けませんでした。そのうち子供たちの恐れていたことが現実となり、二人は命からがら難を逃れたのでした。人と状況を読みちがえることは、よくしてしまいがちなことです。このことはイエスが今日の福音で指摘しています。「だまされないように気をつけていなさい。私の名をかたるものがいるが、ついて行ってはならない。」イエスは警告しています。

イエスはこうも言います。「時はすぐそこまで来ている。」新しい世紀、２００１年の前夜、これが世の終わりだと聞いていた人々の間で、混乱が引き起こされました。人々が告解に殺到したのを記憶しています。永遠の命に飢えかわき、命の移り変わる自然の運行を突如として認識したからです。イエスはしるしについて語られます。確かに私たちはいついかなるときにも、ほんの曲がり角にさえ死が潜んでいることを皆よく知っています。準備はできていますか。私たちを抱擁しようと待っていてくれる永遠の賜物を自ら整えるべきでしょう。それとも、私たちは大地震を待たねばならないでしょうか　（Beatrice）

王であるキリスト(C年)

「今日、あなたは私と共に楽園にいる」(ルカ２３：４３)

主イエスは二人の犯罪人と一緒に十字架にかけられました。そのうちの一人はイエスを罵りました。もう一人の方は彼をたしなめ、さらに主に向かって「イエスよ、あなたの御国においでになるときは私を思い出してください」と頼みます。主は悔い改める盗賊に対して「今日あなたは私と共に楽園にいる」と仰いました。

彼は、主が「父よ、彼らをおゆるしください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈るのを聞いたのでしょう。そしてこの人が神から特別に愛された油注がれた者(メシア)だと言われているのは、政治的にユダヤをローマから解放するという意味ではないと直感したのでしょう。イエスという方が不思議な愛の方だと知ったのです。悔い改めている人間は考えも柔軟になっていて、自分の心にしみとおる愛の言葉を聞き逃さなかったのです。ところがもう一人の盗賊はそうではなく、メシアというものは民衆が待ち望んでいるローマからの解放者、軍事的指導者、偉大なダビデ王のような人間であるはずだとの考えに凝り固まっていました。彼は今の耐えがたい苦痛から逃れたいということだけを望んでいたので、イエスの祈りの言葉も耳を素通りして行ったのです。

悔い改めた盗賊は、自分の霊魂を救ってくださいとは言っていません。ただ自分を思い出してくださいと頼んだだけでした。彼は自分が人生の失敗者であり、最も惨めな者、この世にいないほうがいいと社会から判断された存在、まったく無価値な男だと痛感していました。とても我が魂を救いたまえとは口にできなかったのです。

主はこの痛悔する霊魂の謙遜な願いに、「今日、あなたは私と共に楽園にいる」と答えます。この「今日」ですが、ルカ福音書には何度も出てきます。「今日、ダビデの町であなた方のために救い主がお生まれになった」(２：１１)、「この聖書の言葉は、今日あなた方が耳にした時、実現した」(４：２１)、「今日、驚くべきことを見た」(５：２６)「今日、救いがこの家を訪れた」(１９：９)などです。この「今日」は神の支配の時であり、永遠の時でもあって、イエス(または神)の呼びかけに砕かれた心で答えるときに開かれる今日なのです。

ある中学生が母親につれられて、教会に熱心に通っていましたが、神の愛が彼には少しも理解できないままでした。ところがある日、この福音箇所が彼の心を捉えました。「今日、あなたは私と共に楽園にいる」とのイエスの言葉が彼の心に響き渡りました。イエスが呼びかけておられる声が何であるか、少年にはよくわかったのです。それは今のままの自分を主が受け入れてくれるということなのです。しかも「今日」そうしてくださるのです。その日が彼にとって永遠の今日となりました。その後の人生において苦しいときもあったのですが、この「今日」の体験によって乗り越えることができました。こういう「今日」を持てた人は幸いです。私たちも「今日」主と出会えるはずです。

(新井)

待降節第１主日

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣をあげず、もはや戦うことを学ばない。」（イザヤ２：４）

ニューヨークの国連本部には、この言葉を記した石板があるそうです。そのニューヨークで史上空前のテロ事件があり、大規模な軍事行動が起きるきっかけとなったのですからなんとも皮肉なことです。人類は、イザヤがこの預言を語ってから２千７百年もの間、常に戦うことを学びつづけて来たといってよいと思います。戦争が技術を進歩させると言われますが、戦争というものがその時代の最先端のテクノロジーを用いて戦われるものであることは、たとえば紀元７０年のエルサレム陥落を記述したヨセフスの「ユダヤ戦史」を読むとよくわかります。

イザヤは「終わりの日に」彼の預言が成就すると言っています。この終わりの日は、イザヤに近い時代を言っているのではなく、まだ実現していない終末を指します。そこでは、人間の努力、政治的な手段、平和希求を基とした国際協力などによってではなく、神がもたらす全世界的な具体的恒久的な平和が示されています。

この平和はキリストが世に来られて切り拓きました。あらゆる分裂の源である罪がキリストの十字架と復活によって敗北したからです。キリストは万物を、つまり地にあるものも、天にあるものも十字架の血によって御父と和解させました(コロサイ人への手紙１：２０)。キリストは異邦人とユダヤ人を隔てていた敵意の壁を打ち壊しました(エフェソ人への手紙２：１４)。だからキリストが私たちの平和なのです。「私はあなたがたに平和を残し、私の平和を与える」（ヨハネ１４：２７）と言われた通りです。キリストの平和が私たちの心を支配でき、私たちは心に平安を保つことが出来ます。しかし、罪がすべての人の中で死ぬまで、平和は完全には実現しません。つまり、世の終わりにキリストが再臨して全宇宙からその主権が確認されるとき、初めて決定的･普遍的な平和が訪れます。キリストの平和はすでに私たちにおいて始まっていますが、まだ完成してはいません。キリストの平和の完成を目指して教会は地上を旅しているのです。

キリストは殺されることによって、そして自分を殺す罪びとたちを赦すことによって、そして死の闇から甦られたことによって、憎しみを乗り越えることを私たちに教えてくださいました。キリストによって憎しみが乗り越えられます。「汝の敵を愛せよ」(マタイ５：４４)という主の教えは、主の十字架と復活を通して、弱いそして肉に釘付けられた私たちにも可能となりました。「平和をもたらす者は幸いである」(同５：９)と主は仰いましたが、平和をもたらす人間的努力は、祈ることによって力が与えられます。キリストが私たちの間で働かれ、キリストの平和が私たちの間に実現していくからです。祈らないと聖霊でなくただ人間的努力だけにより頼むことになります。そうなるとキリストの十字架の力が現れません。平和を実現するために祈ることが今ほど必要な時はないと思います。

（新井）

カトリック　☆★　アラカルト　★☆（１４）

嶋崎　浩樹（カルメル会）

≪ゆるしの秘跡≫（３）

④罪の告白

実際に告白する場所に行き、神の代理者である司祭に罪を告白します。告白をする場所は、以前は聖堂にある専用の場所で行っていましたが、現在では、告白の秘密が守られ、かつ告白するにふさわしい場所であれば、応接間などで行うことができます。ですので、足腰に不安のある方や障害を持っている方は事前に司祭に話せば、配慮してくれます。また、その場合、告白する人は、けっして跪く必要はなく、その場所の事情にあわせて椅子に腰掛けて行います。

では、個別に行われるゆるしの秘跡について具体的に見ていきたいと思います。

司祭／信徒　父と子と聖霊の　み名によって。　アーメン。

司祭　（たとえば）回心を呼びかけておられる神の声に心を開いて下さい。

聖書の朗読

＜この部分が省かれ、直接、次の「罪の告白への招き」を行う場合があります。＞

司祭　神のいつくしみに信頼して、あなたの罪を告白して下さい。

＜罪の告白＞

罪の告白は、余計なことを言わないで、何をしたかを簡潔に述べます。罪の背景を説明する時にも簡単にする方が良いでしょう。もし、何か疑問に思えば司祭の方から伺います。

また、「○○さんからこのようなことをされたので、罪を犯しました」というように、人のせいにするのではなく、自分がどのように罪を犯したのかを話すようにします。ゆるしの秘跡は、他人のためではなく自分のためなのですから。

中には、罪の回数をおっしゃる方もいますが、あまり意味がありません。回数ではなく、なぜ罪を犯したのか、またその時にどのように感じたのかという原因を見つめることの方が大切です。

それから、罪の告白の秘密は厳守されます。司祭がこの罪の告白を利用したり、誰か特定できるような形で第三者に話すことは禁じられています。ですので、ゆるしの秘跡のときに、相談を持ちかけられると、その後のフォローができなくなりますので、注意した方が良いと思います。

偉い人はだれ？

幼稚園でも２学期になると、“お受験”ということばがしばしば耳に入ってきます。公立の学校へ行く人たちは、それが当たり前とでも思っているのか、静かになりを潜めているのですが、問題は、付属校とか〇〇有名校の小学部に入学させようとするお母さん達の競り合いにあります。おおっぴらに宣言したら、もし落ちた場合、世間体としての顔があげられない。　　だから黙っていなければ　と思うのです。ところがどっこい、それだけでは終わらない。心中は、ほかに受験しそうな雰囲気を匂わせる人に対し、虎視たんたんと目を光らせる。“もしやどこそこの学校じゃないかしら。”とか“あの子は受かったのかしら。”など、詮索もはなはだしい。今まで何年かお友達として、つきあってきたお母さん同士なのに、その途端から“昨日の友は今日の敵”になってしまうのです。

人間の自然性の傾きには、どうしても他人より優れた、人の上に立ちたいという、比較と欲求の心があります。それは古今東西、また、過去から展開されてきた人間歴史の喜悲劇の中に、必ずといっていい程、このパターンが見られるのです。いえ、そんな過去を客観視するだけではなくても、現在でも人が２人以上集まれば、無意識の中にこの“比較の人生”が働き始めるのです。結果は？といえば、妬み、羨望、傲慢、威張りなどが出てくる。逆に傷ついた人は、絶望と自信喪失の谷底に落ち込んでしまいます。そんな中で、“自分の心の状態はコレだっ！”というように、自分を客観視できたらいいのですが、なかなかそうはいかない。そんな状態には平和、平安、穏やかな喜びなどあろうはずはなく、不安と不愉快と不和しか残りません。

イエスの弟子も、この人間像をまざまざと露出しました。“私たちの間で、誰が一番偉いのだろうか”と、ペトロさえ言っています。そこで師イエスは言われました。「私の名のゆえに、この幼子を受け入れる者は、私を受け入れる者である。あなたたち皆の間でもっとも小さい者こそ、最も偉いものである。」（ルカ９、４６～４８）この自然性を超越した“最も小さい者になる”とは、いくら頭で言ってきかせてもダメ。心で思うだけでも足りない。

ただイエスの小さな歩み（ほんとうは超越的存在なのに）に感動して、心動かされた人だけが、イエスの後に従って歩むことが出来、比較のない神の愛に浸る喜びを味わうことができるのだと思います。Ｓｒ．熊田　照子　お告げの姉妹会

…ケリトの水にうるおされて…

カルメルの聖人たちの祈り

7. アヴィラのイエスの聖テレジア（1515−1582）

アウマダのテレサ・デ・セペダは、スペイン、アヴィラで1515年に生まれた。良家の出で、身分相応の社交生活を楽しんだ彼女が生きたのは、城と騎士と王の時代であった。カルメル会（御託身修道院）への入会は1535年である。1542年から1544年にかけてのおよそ2年間、彼女は、あやまった謙遜のために、祈りから遠ざかっていた。回心の体験後、テレジアは祈りに戻り、霊魂における神の生ける現存を体験し始めた。それに先立って、マルティン・ルターが教会から離れ、自分で改革を始めていた。このことがテレジアに与えた苦しみは、彼女の著作にはっきりと表されている。彼女がいたカルメル会にも、多くの生ぬるさがあり、それが修道女たちの沈黙と観想の生活にもたらす害をテレジアは良くわきまえていた。

1562年、アヴィラにおける聖ヨゼフ修道院創立をもって、彼女のカルメル会改革が始まった。当初は、彼女の努力は大反対にあったが、徐々に修道女たちはこの改革の益を認めるようになった。1567年に十字架のヨハネに出会い、彼が改革に対する熱意を共有していることを知った。彼は、同時に男子カルメル会の改革を始めた。テレジアは、禁域の修道女でありながらも、スペイン中を旅し、改革修道院を作った。

彼女は、最も高度な神秘的恵みを受けた真の観想者であった。彼女は師であり、その数々の著作は、現在にいたるまで霊感の源となっている。それらに匹敵するものはなく、彼女は教会博士の称号を受けている。『自叙伝』は、彼女の生涯の物語である。『完徳の道』は、祈ることを教えるため、彼女に従う修道女たちのために書かれた指南書である。『神愛考』は、女性が聖書に自由に近づくことはふさわしくないと考えられていた時代にあって、大胆に書かれた作品である。後に聖女の聴罪司祭は、彼女にこの注釈書を焼き捨てるよう命じ、直ちに彼女はその命令に従った。しかし幸運にも、他に書き写されていたものが、そのまま残された。彼女が生きたのは、宗教裁判の時代であり、すべての著作が疑問視されたのである。これらの著作と『神への叫び』は神に対する彼女の燃えるような愛と、神に完全に焼き尽くされたいという熱望を表現している。『神への叫び』は、聖体拝領後の祈りを記したものである。『創立史』は、大変な大事業に直面していた彼女の謙虚さと、彼女を助けることのできるただ一人のお方への必要を語っている。『霊魂の城』は、祈りについての教えである。霊魂を表現するために、城のイメージを用

いているが、これは、当時そのようなことは容易には理解されなかったからである。今日では、このイメージを思い浮かべるためには少し想像力が必要であるが、おそらくは守衛所つきの大邸宅を表す、現代の各国語にそのまま翻訳されている。名を挙げられている先の時代の聖人たちの祈りとは異なり、テレジアの祈りは、時々取り留めない状態になり、別の方向へと向かっていった。彼女の祈りに、他の考えが混じっているのはそのためである。あらゆる物事は、愛するお方へと向かい、祈りはすべての物事の一部分である。テレジアは、1582年10月4日にこの世を去り、教会は10月15日に彼女の記念を執り行っている。

—— 祈り ——

『自叙伝』より

おお主よ、あなたは私を救おうと決意されたように思われます。どうぞそれが主のみ心でありますように。あなたはあらゆるお恵みで私を満たしてくださいました。それならば、主がこのように絶え間なくお住みになるべき一つの住居が、これほど汚れを受けないほうがよい（それは私自身の益のためではなく、あなたの名誉のためです）と、なぜお思いにならなかったのでしょうか？　主よ、こう申しあげるだけでも私は恥ずかしく感じます。なぜなら、過ちはみな私から来ていることを存じておりますから。この年ごろから、私が全くあなたのものであるために、あなたは私のためにこれ以上のことは何もおできにならなかったことでしょう。（1:7）

主は永遠に祝せられますように。私が主をお愛しすることをやめるよりは、むしろその前に、どうか、主が私を死なせてくださいますように。（5:１０）

罪が増すにつれて、私は徳の実行のうちに見出していた喜びや味わいを失い始めました。主よ、これらのお恵みが私から遠のいたのは、私があなたから遠ざかったためであることを、私は大変はっきり分かっておりました。（7:１）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この記事は、跣足カルメル在俗者会員ペニー・ヒッキー氏が編集された Drink of the Stream: Prayers of Carmelites (Ignatius Press, San Francisco, U.S.A., ホームページ http://www.ignatius.com) の中から、出版社の許可を得て、抜粋・邦訳したものです。

（注）タイトル中の「ケリトの水」とは、主が預言者エリヤに言われた、「ここを去り、東に向かい、ヨルダンの東にあるケリトの川のほとりに身を隠せ。その川の水を飲むがよい。わたしは烏に命じて、そこであなたを養わせる（Ｉ列 17:3-4）」ということばに由来しています。

（浜田裕子訳・編）

いのちの言葉

２００４年１０月

わたしどもの信仰を増してください。
（ルカ　17・5）

この言葉には、信仰がぐらつくのを経験した弟子たちの切なる願いが込められています。彼らの“信仰の薄さ”[1]をイエスがとがめたことは、福音の中に何度も出てきます。イエスが「岩」と呼ばれ、その上にご自分の教会を建てると言われたペトロでさえ、「信仰の薄い者よ」[2]と叱責されました。イエスは、ペトロの信仰が弱まらないよう、祈らねばなりませんでした[3]。

“信仰を増してほしい”というのは、キリスト者皆の願いでしょう。信仰が揺らいでしまうのは、私たち一人ひとりの人生で起こりうることだからです。リジューの聖テレジアは、生涯を通して、神の娘として、非常に深い神との交わりを生きた人ですが、人生の最後の一年半には、“信仰を試される試練”に遭いました。それは、一つの壁が天にまで立ちはだかり、空の星を覆い隠すようなものだった[4]、と彼女は語っています。

わたしどもの信仰を増してください。

私たちは、神が愛である[5]と知りながらも、この世に一人ぼっちであるかのように生き、私たちを愛し、導いてくださる父がいないかのように生活しがちです。この父は私たちのことをすべてご存じで、髪の毛の数さえ知っておられる[6]方です。私たちが果たす良いことも、出遭う試練も、すべてが私たちの善となるように、はからってくださる方なのです。

ヨハネ福音史家の言葉を、私たちも自分のものとして言えるよう求められています。「わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を…信じています」[7]と。

実際、“信じる”とは、神が私たちを見ていてくださる、愛してくださる、と感じることです。私たちの祈り、言葉、行動の一つひとつ、どんな悲しいこと、うれしいこと、どうでもいいことも、病気も、重要なことやちょっとした行い、考えや感情も、本当にすべてを、神は見ていてくださるのだ、と知っていることです。

もし神が愛でおられるなら、神を完全に信頼するのは、当然のことでしょう。だとすれば、私たちは、この信頼をもって、しばしば神と語らい、自分のこと、決心や計画を、神に話すことができます。私たち一人ひとりが、神から理解され、慰められ、助けていただけるのを確信しながら、神の愛に自分をゆだねることができるでしょう。

わたしどもの信仰を増してください。

この弟子たちの願いにこたえ、イエスは言われます。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」[8]と。「からし種一粒ほどの」と言われるのですから、イエスが私たちに求めておられるのは、ある程度の信仰ではなく、イエスに根づいた本物の信仰です。私たちは、自分の能力だけを頼りとせずに、この信仰からすべてを期待するよう招かれています。

私たちを愛してくださる神を信じるなら、不可能なことは何一つなくなるでしょう。私たちの内にも存在し、周りでもよく見かける無関心やエゴから「抜け出る」こと、また家庭の不和が解決することも、私たちは信じられるでしょう。世代や社会層の異なる人々

---

[1] マタイ８・26，16・8，17・20参照
[2] マタイ14・31
[3] ルカ22・32参照
[4] 「自叙伝」参照
[5] ヨハネの手紙一　4・8参照
[6] マタイ10・30参照
[7] ヨハネの手紙一　4・16
[8] ルカ17・6

の間や、長く分裂の続く諸キリスト教会の間にも、一致が実現することを信じられるでしょう。異なる宗教、種族、国民の間に、普遍的な兄弟愛が芽生えること、また、いつの日か人類が平和の内に生きる日が来ることも信じられるでしょう。そう、すべてが可能です。私たちが、全能の神に働いていただくようにするなら、何一つ不可能なことはありません。

わたしどもの信仰を増してください。

では、この「いのちの言葉」を生き、信仰を増すには、どうすればいいでしょうか。

何よりもまず、祈ることです。特に困難や疑いに出会う時、祈りましょう。信仰は一つの神の賜物です。「主よ、私があなたの愛の内にとどまれるようにしてください。あなたが私を、私たちを愛してくださることを、信仰と経験によって、どんな瞬間にも感じ、気づき、知ることができるようにしてください」と祈り求めることができます。

また信仰を増すには、愛することです。ひたすら愛し続けるなら、私たちの信仰は、本当に堅固で、揺るぎないものとなっていくでしょう。私たちは神の愛を信じるだけでなく、心の中でそれに触れるように感じることでしょう。そして自分の周りで、“奇跡”が起こるのを目にするでしょう。

これを経験した、イギリスのある若い女性は語っています。「母が父と別れて、別のアパートに引っ越すことに決めた、と打ち明けてきた時、私はとてもショックを受け、絶望しそうになりました。でも母には何も言葉を返しませんでした。以前の私なら、逃げ道を探したり、部屋に閉じこもって音楽を聞いたりで終わったでしょうが、福音を生きようと決心した今は、この苦しみの中にしっかりとどまり、十字架に『はい』と答えたいと強く感じました。私にとっては、外面的な出来事を越えた部分で、神の愛を信じるチャンスでした。

その後も、母が父に対する思いをすべて私にぶつけてきた時には、自分の考えはわきにおいて、愛をもって母の話に耳を傾けるよう努めました。一方で、父の近くにもいるよう心がけました。

こうして数ヶ月が過ぎましたが、父と母はやり直すことを決め、そのための努力を始めたのです。母の次の言葉は、私の心に残りました。『お父さんと別れると、あなたに話した時のことを覚えている？　あなたの態度を見て、私は自分が誤った決断をしそうになっていると気がついたのよ。』

あの時、私は母には何も言いませんでした。沈黙の内にイエスに『はい』と言っただけです。きっとイエスはすべてをしてくださる、と確信しながら。」

キアラ・ルービック

★いのちの言葉はその月の主日のミサで朗読される聖書の言葉を黙想し、生活の中で実践するための助けとして、書かれたものです。

ある朝、娘の外国人の同級生の父親が家に来て、「息子が感染症にかかり、薬もなくとても苦しんでいます」と言いました。病院に行く必要がありましたが、経済的に難しいのがわかりました。私は勇気を出して、近所の病院や役所や保健所にも相談しましたが、「本人が全額支払わない限り薬はあげられない」と断られてしまいました。私は愕然とし、電話口で涙がこぼれました。気がつくと息子が横に立っていて「お母さん、神様にお祈りしよう」と言いました。私はハッとして、神様に信頼して息子と心を合わせて祈りました。その晩、全く思いがけず、ある医師が無償で往診して下さることになりました。父である神様の存在に手で触れるような一日でした。（M）

フォコラーレ
連絡先:03-3332-8460/03-3399-5508
E-mail:tokyofocfem@ybb.ne.jp
いのちの言葉のホームページ
http://www.geocities.jp/focolarejapan

ポプラ

蛭田　幼一

遙か中空に三十メートルの樹木がそそりたっているのを、僕は田舎のとある駅で見たことがある。空気は澄み切っていて、赤煉瓦の異国風の家が、凍りついたように建っていた。……この狭い場所にあるのは、厳(いか)つい形をした無名の木だ。枝は横に伸び、変色した葉叢が波うっている。それをなぜポプラと思ったろう。軽い昂揚すら覚えて、なぜポプラと思い誤ったろう。ポプラなら、十五年も前のあの樹がそうだ。記憶がそこを探りあてる。祈りにも似た気持ちで、僕はその記憶に拘わる。

いちじく　（3）

加藤　幸子

福音書に、イエスが、実のなっていないいちじくの木を枯らしてしまう箇所がある。（マタイ２１章１８）恥ずかしながら私は、これは、空腹状態のイエスが、たまたま通りがかりにあったいちじくの木に、季節はずれで実がついていなかったのに腹をたててしたことと思っていた。つまり、イエス様を、空腹だと腹が立つこの私と同じレベルで見ていたのである。主は、木を枯らした後で、弟子たちに言われた。「もしあなたたちが信仰を持ち、疑わないなら、わたしがいちじくの木に対してしたようなことができる。」

「信仰」ということばは曲者である。同じことばでも、その内容は、場面、状況に応じて全く異なるものとなる。私たちの意識は、空に浮かぶ雲のようなものである。あるいは川の流れのようである。一時として同じところにとどまっていない。たえず変化し続けている。そんな存在でしかないこの私に、不変の信仰、疑いの伴わない信仰など、自分の力ではとても持ちえない！持とうとする意志はある。ペトロは勇ましかった。最後の晩餐で主に言った。あなたと共に死ぬ覚悟です、と。しかし、カヤファ邸で女中の一人にイエスの仲間だね！と詰め寄られると、思わず否定してしまうほど（つまり防衛本能が意志に勝っている状態）人間とは弱いのである。死ぬのは怖いのである。

なぜ死ぬのが怖いか。まず、肉体的に苦しい。呼吸が出来なくなるのは苦しい。そして、今まで積み上げてきたすべてが失われる。いやだ、いやだ、いやだ！そして、死の先に何があるのかわからない…。つまり、主がこの人間界にまで降られ、心血を注いで教えられ、この私を救いとると言われるそのことばを心の底で信用していないのである！頭では一生懸命信じようとしても、この心が疑い、ウンともスンともいうことを聞いてくれないのである。私たちの「信仰」の実態はこのようなものでしかない。

それなのに主は、疑いのない信仰を持つなら、とこんな私に言われる。主よ、私を困らせたいのですか？いや、ちょっと待て。その前に主はいちじくの木を枯らされたではないか。つまり、疑いでいっぱいの私の心の根元を枯らし、不動の信仰を与えてくださる、と言われているのではないか！いつ？いつ？いつ？と畳掛けて迫りたいところだが、主のプランというものがおありになるはずだ。それに合わせるよう努力しよう。

聖書で祈る

「人々は子供たちを連れてきて、イエスに手を触れていただこうとした」
マルコ９－１３

大人たちはイエスの元にやってきた。子供達を連れて。その子供たちの名前は、それぞれ、喜び、怒り、嘆き、悲しみ、などであった。

弟子たちは、これらの人々をたしなめた。
「なぜ、こんな小さい子たちを連れてきた？」
「この方は貴い方なのだ。こんな小さい子供は、いつ、何時、突飛なことをするか、知れやしない。先生の大切な説教の邪魔になる。子連れで来る所ではないのだ。まして、子供が騒いだら、折角遠くから、先生の話しを聞きにやってきた人々の迷惑ではないか」
弟子たちは、子供を連れてきた大人たちを、思慮分別に欠ける者としてたしなめた。

しかし、イエスの御眼には全く異なって見えた。さて、どのように？
幼児を連れてきた大人と、幼児、そして、それをたしなめる弟子の三者が合体して、スーッとひとりの人間となる。
それは、私自身の姿でもある。

分別ある大人として、職場で、家庭で一生懸命頑張ってきた。様々な人間とのやりとりの中で、ムッとすることもあるし、根も葉もない陰口をたたかれ、心の中で泣いたこともあった・・・。だけど、自分の感情を押さえ付けるのはもう限界だ、なにもかもイエス様の前に注ぎだしたい、器にたっぷり溜まった感情（幼児）を抱えて、御聖櫃の前にやってきた。
「主よ、私はもう限界です、なにもかもあなたの前にさらけだします。助けて下さい！」

これほどに切羽詰まっている状態の時には、私の中の「たしなめる弟子」は姿を消す。

ところが、自分に余裕がある状態、あるいは、あまりにも自分の感情を押し殺しすぎて、自分の心の状態に鈍感になっているような場合はどうか？

御聖体の前で祈る私は、あらん限りの、絵に描いた餅を並べ立てる。格好を付ける。「主よ、世界中に平和が来ますように。貧しい国の可愛そうな子供達が幸せになりますように。病気で苦しんでいる人々が早くよくなりますように、等々」

主は大きな溜め息をついて言われる。
－ああ・・あなたの祈り、それはそれで結構だ。しかし、その祈りは、少しもわたしの心に響いてこない。フワフワと宙に浮いて消えてしまう霧のようだ。なぜだかわかるか？それは、あなたにとって、実際には何のかかわりもないこととして、あなたから切り離して言っているからだ。どうしてわたしの前で格好をつけるのか？

「しかし、主よ、世界平和なんて、とてつもないことで、私には出来ない事です。」

－では、あなたにとって平和とは何か？あなたと、あなたと関わりがある人々との平和とは何か？

「・・・　おそらく、お互いに、個性や違った考え、文化、習慣などを、排除したり、批判、毛嫌いしたりするのではなく、認めて、受入れ、尊重することです。」

－では、あなたは、あなたの伴侶や子供たち、あるいは会社の同僚、友人、知人、地域の人々をそのように受け入れているか？

「いいえ、夫があんなに冷たい人だとは思いませんでした。結婚前は、私に対してもっと思いやりがあったのに・・・。子供の躾や教育に関しても私まかせで、あ、子供ときたら、集中力がなくて、ちっとも勉強に身が入らなくて、来年は中学受験だというのに、真剣味が足りなくて、私が口を酸っぱくして言っても馬の耳に念仏で・・・。」

－それは、彼等に対して、あなたがこうであって欲しいと願う理想像にしあげようとやっきになっているからだ。

「・・・主よ、そうかも知れません。」

－そして、彼等があなたの思い描いた理想通りにならないと文句を言い、嘆き、怒り、自分の思い通りになった時だけ喜んでいる。それは何も、あなただけの問題ではない。人間とはそういうものだ。お互い、真実の姿を見つめず、受け入れないから軋轢が生じ、争いに発展する。ことばや行為によって傷つけあい、憎みあう。平和がない状態とは、このようなことだ。

「私はどうしたら良いのでしょうか？」

－自分がどのような者か、自分以外の人間が、本当はどのような存在なのかをよくよく見つめなさい。ただ、あなたの心の眼は殆ど盲目だ。なぜなら、様々な囚われがあり、そして感受性の傷、過去の様々な傷、ゆがみがあるからだ。わたしはそれらを矯正したいのだが、まず、感受性の傷を癒したい。真実を見つめられるようになるために！

－だからこそ、わたしの前に、感受性という名の子供達を連れてくるのをためらってはいけない。これを妨げる弟子たちとは、あなたの中の「建て前」なのだ。わたしの前に、子供たちを連れてくるとは、あなたの「本音」をわたしにさらけだすことに他ならない。どうしてわたしの前に自分の裸、ありのままの姿をさらけだすのをためらうのか？わたしには、あなたの全存在、つまり、魂から心、考え、密かな思いすらもすべて、立体的に見えているのだ。なぜ恥ずかしがるのか？なぜ自分の心に垣根を設けるのか？
自分の密かな思いの、あまりの邪悪さを隠したいのか？
わたしが、あなたのその部分を見て、赦さないとでも思っているのか？！
わたしの慈悲がそれほどちっぽけなものだとでも思っているのか！
おそれるな！まず、自分の汚れた部分すらわたしの前で隠そうとするほど縮こまっているあなたの心を、わたしの慈悲の光で暖めてあげよう。来なさい！

－御覧、ルカ１８章１５節では、人々が連れてきたのは赤ん坊だ。つまり、

人間の本能部分までさらけだしているのだ。食欲、睡眠欲、性欲、生存欲。もちろん、これらがあらわになるには、わたしの慈悲の光で照らし出されて初めて見つめることが可能なのだ。この段階で、あなたに望むのは何か？自分の惨めな部分を受け入れることだ。他の人々の前で、あるいは自分自身に対しても、だが、取り澄ました、あるいは虫も殺さぬ、笑顔を絶やさぬ善人としての仮面の下にあるものを、わたしが、照らしてみせた時、それに目をそむけず、直視し、受け入れることだ。

－よくお聞き！赤ん坊は、空腹だと言っては泣き、眠いといってはむずかる。排泄にも、親の手が必要だ。しかし、忘れてはいけない。彼らは、人を疑うことを知らない。幼児のような信仰とは疑いのない、全面的な信頼の事だ。

－「全面的な信頼」人はこのことばを簡単に口にし、他の人にもこれを勧め、自分でも実行しているつもりになる。しかし、これほど難しいものはないのだ。

あなた方には、それぞれ、御父から与えられた体、気力、能力、知力、五感がある。これらを駆使して、一瞬一瞬全力を尽くしてほしい。なるほど、これは難しい。まず、何か、あなたの得意分野において、全力を出して当たってみてほしい。なんでも良い。例えば、人に親切にする、人の悪口を言わない、どんな人にも挨拶をする・・・

言っておくが、誰ひとりとして、自分の真の姿を知っている人間はいない。誰しも、多かれ少なかれ、自分に対する思い込み、うぬぼれに犯されているものだ。これがなくならないうちは、なにが自分のもので、なにが神からのものかを混同している。この水際がはっきりしないうちは、全面的な委託という姿勢にはならない。わたしを信じついてきなさい！赤ん坊はわたしの腕の中に引き取れているのだから。

****

Il giorno della morte è
un sabato senza tramonto.
Ancora un'alba sul mondo
altra luce
un giorno mai vissuto davvero
ancora qualcuno è nato con occhi e cuore
e sorride.

Marco Maffezzoli (1971.6.8-1998.10.10)

死の日は
夕暮れのない或る土曜日。
世界にはまだ夜明けが再びおとずれ
別の光が
今まで正に経験した事のない一日
また誰かが目と心臓をもって生まれ
そして微笑む。

マルコ・マッフェッツォーリ (1971.6.8-1998.10.10)

浅野　菜生子　訳

カルメル会の企画案内

東　京

カルメル修道会　と　聖テレジア修道院（黙想）

2004年4月～2005年3月までの黙想会予定表

1．　聖　書　深　読　（毎回土曜日　夕食～日曜日　１６時）

11月２７日～２８日・・九里彰師

'05/３月１９日～２０日・・奥村一郎師

2．　奉献生活者のための黙想会

１２月２７日（月）１６時　～１月５日（水）朝・・・九里彰師

3．　カルメルの聖人を見つめ霊性を深める

（毎回水曜日　１０時～１６時）・・・九里彰師

Ａ・・・大聖テレジア　　Ｂ・・・十字架の聖ヨハネ

１１月２４日

１２月１日　　１月１９日

２月２３日　　３月２３日

注：［　　］で囲んだ日にちは以前と変更になりましたのでご注意ください。

4．　青年男女黙想会・・・九里彰師・神学生

１１月６日（土）１６時～７日（日）１６時

7．　大祭日のミサにあずかるために

チェックイン午後３時から。（講話なし）　チェックアウト午前１０時まで

クリスマス　　１２月２４日（金）夕食なし～２５日（土）朝食あり

復　活　祭　'05/　３月２６日（土）夕食～２７日（日）朝食

聖週間を黙想する　'05/　３月２４日（木）夕食～２７日（日）朝食

8．特　別　黙　想　会

最初の日の夕食をすませてからお越しください。どなたでも参加できます。

１１月１９日（金）２０時～２１日（日）１５時　Sr.伊従信子

9．待　降　節　黙　想　会　　チプリアノ師

１２月３日（金）夕食　～　５日（日）１５時

東　京

＊　電話でのお問い合わせは　午前9時～午後4時45分までにお願いします。
また、お申し込みは電話でもお受けいたしますが、間違いを避け、時間も問いませんので
なるべくＦＡＸ・はがき・Ｅメールでお願いします。（お返事は致します）

〒158-0093 東京都世田谷区上野毛 2-14-25
聖テレジア修道院（黙想）担当　br 原
TEL　０３－５７０６－７３５５
FAX　０３－３７０４－１７６４
Ｅメール　mokusou@carmel-monastery. Jp

東京カルメル在俗者会黙想会

場所：上野毛聖テレジア修道院（黙想）
１１月９日（火）夕食～１２日（金）指導：九里彰神父

空きがある場合には、一般の方でも参加可能です。
お申し込み・問い合わせは下記まで。
TEL/FAX　０３-３８９２-１３７８　阿部昌子

カルメルの霊性研究クラス

＊十字架の聖ヨハネ：『カルメル山登攀』
　１０月２７日、１１月１７日、１２月８日、１２月２２日。
（１０月２７日は、ミサ、第３部第４３章～第４５章、懇親会。１１月からは『暗夜』を読む予定です。）
＊　アヴィラの聖テレジア：『自叙伝』
　１１月４日(木)、１２月２日（木)、１２月１５日。
（１１月４日は、第３３章を読みます。）
どちらも水曜日、夜７：００より、上野毛教会信徒会館２階２６号室でおこなわれます。時々、都合により曜日を変えますので、ご注意ください。

祈りの集い

１０月２８日（木)、１１月２６日、１２月１７日
10月は都合により木曜日に変更しました。
毎月一回金曜日の夜７：００より、上野毛聖テレジア修道院（黙想）小聖堂にて。都合の悪い場合は上野毛教会信徒会館ホールでおこなわれます。何の準備も要りません。
７：００～８：００　み言葉と念祷
８：００～８：３０　分かち合い（茶話会）

[霊性研究クラス][祈りの集い]、いずれも申し込みは不要です。不定期の参加も可能ですが、「カルメルの霊性研究クラス」の方は、なるべく継続して出席されることが望まれます。

担当：九里（くのり）　彰神父

東　京

青年男女のための黙想会

祈りを生きる

ーキリストの神秘体の中でー

日時：11月6日（土）16時～7日（日）16時
場所：上野毛聖テレジア修道院（黙想）（東急大井町線上野毛駅より徒歩 5分）
対象：高校生以上の青年男女（35歳まで）
定員：20名
指導：九里彰師・神学生
費用：5,500円

参加ご希望の方は、ハガキ・FAX・Eメールで住所・氏名・電話番号・年齢をご記入の上、10月30日（土）（必着）までに、下記までお申し込み下さい。折り返し、こちらよりご連絡させていただきます。

（お問い合わせ及びお申し込み先）
〒158-0093　東京都世田谷区上野毛 2-14-25
カルメル会上野毛聖テレジア修道院（黙想）
TEL　(03) 5706-7355
FAX　(03) 3704-1764
E-mail mokusou@carmel-monastery.jp

東　京　　カルメル会聖テレジア修道院企画

特別黙想会

《　テレーズとともに祈る　》

１１月１９日（金）２０時　～　２１日（日）１５時まで

指導：Sr 伊従信子（ノートルダム　ド　ヴィ）

“私のために　そんなにも小さくなられた神を、

私は恐れることはできません。

私は幼いイエスを愛する！

愛といつくしみそのものである方を。”

当日は２０時から始まりますので夕食を済ませてお越しください。

持参するもの・筆記用具、パジャマ

参加費：￥12,000（当日持参）

お申し込み　お問い合わせ
〒158-0093 東京都世田谷区上野毛 2-14-25
カルメル修道会上野毛聖テレジア修道院（黙想）
Tel　03-5706-7355　Fax　03-3704-1764
Ｅメール　mokusou@carmel-monastery.jp

京　都

黙　想　会　案　内　（宇治カルメル会）

（2004年10月から2005年12月まで　）

聖書深読　（土曜日午後５時集合/日曜日午後４時解散）

	１１月２０日～２１日	九里彰神父
	１２月１１日～１２日	奥村一郎神父
０５／	３月１２日～１３日	奥村一郎神父
	６月１８日～１９日	カルメル会士
	１１月１９日～２０日	カルメル会士

＊日帰り深読　（日曜日午前１０時～午後４時）

０５／	１月１６日	奥村一郎神父
	４月２４日	新井延和神父
	９月１１日	カルメル会士
	１２月１１日	カルメル会士

＊ミニ深読　（火曜日午後２時～４時）

０５／	２月　８日	深読スタッフ
	５月１０日	深読スタッフ
	７月　５日	深読スタッフ
	１０月１８日	深読スタッフ

一般のための黙想

６日間の黙想	０５／　４月２９日（金）夕～５月５日朝	福田正範神父
	１２月３０日（金）夕～１月５日朝	カルメル会士

青年男女黙想会（午前１０時～午後５時）

	１０月１７日（日）・・・・・	カルメル会士・カルメル宣教会
０５／	４月１７日（日）・・・・・	カルメル会士・カルメル宣教会
	１１月　６日（日）・・・・・	カルメル会士・カルメル宣教会

水曜一般黙想会（午前１０時～午後４時まで）

１０月１３日	アビラの聖テレジア・・・・	Ｓｒ．ベアトリス
１１月１７日	諸聖人の通功・・・・・・・	長岡幸一神父
１２月１５日	十字架の聖ヨハネ・・・・・	奥村一郎神父

京　都

０５／	１月１９日	仏教とキリスト教の対話	・・奥村一郎神父
	２月１６日	聖書の祈り	・・・・・・・・新井延和神父
	３月１６日	復　　活	・・・・・・・・・福田正範神父
	４月２０日	日本の神学	・・・・・・・・奥村一郎神父
	５月１８日	聖霊の賜物	・・・・・・・・長岡幸一神父
	６月１５日	イエスのみ心	・・・・・・・カルメル会士
	７月１３日	カルメルの祈り	・・・・・・カルメル会士
	９月１４日	エディット　シュタイン	・・アロイジオ神父
	１０月１９日	神との親しさ	・・・・・・・カルメル会士
	１１月１６日	聖性への招き	・・・・・・・Sr. ベアトリス
	１２月１４日	十字架の聖ヨハネ	・・・・・カルメル会士

四旬節黙想（午後５時～午後４時）

０５／２月１２日（土）～１３日（日）・・・・・・福田正範神父

待降節黙想（午後５時～午後４時）

０５／１２月３日（土）～　４日（日）・・・・・・カルメル会士

聖テレーズの黙想（午後５時～午後４時）

０５／　９月３０日（金）～１０月１日（土）・・・伊従信子氏

奉献生活者のための黙想会（午後５時集合/午前９時解散）

	１０月１８日（月）～１０月２７日（水）	・・・福田正範神父
０５／	７月２１日（木）～　７月３０日（土）	・・・カルメル会士
	８月　４日（木）～　８月１３日（土）	・・・カルメル会士
	８月１７日（水）～　８月２６日（金）	・・・カルメル会士
	１０月　２日（日）～１０月１１日（火）	・・・カルメル会士

その他皆様が企画なさったグループ黙想会、個人黙想も歓迎いたします。

申し込み方法

電話でも受け付けておりますが、できるだけＦＡＸあるいはハガキでお名前と連絡先をご記入の上お申し込みください。なお、お電話でお申し込みの場合、受付が休みになっている時はすぐに返事できないこともあります。その際は、おそれいりますが後日改めてお問い合わせくださるようお願い申し上げます。

宇治カルメル会　聖テレジア修道院（黙想）
〒611-0002　京都府宇治市木幡御蔵山 39-12
TEL　0774-32-7016　FAX　0774-32-7457

名古屋

「立ちとまって、ひとりになって、聴いてみよう！」

～都会の中の一日静修～（2004）

この会は現代の忙しい社会の中にあって、また都会の中にあって、神さまとの静かなひと時を過ごすために企画しました。イエス様は「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ28：20）といわれました。
共にいるイエス様とのひとときを、都会の真中で過ごしてみてはいかがでしょうか。
若者の召命、仕事の刷新、家庭生活の充実、老後のプランなどについて、
イエス様の言葉からヒントをいただきましょう。カルメル・ファミリーがお手伝いします。

第10回　11月23日（火）　「わたしたちの使命」　九里彰神父

＊　時間　いずれもAM10：00～PM4：00

＊　場所　カトリック日比野教会（地下鉄・名城線、日比野駅下車2番出口徒歩5分
（駐車場は利用できません）

＊　費用　1，000円

＊　持ってくるもの　聖書・筆記用具・ロザリオ・昼食の弁当

＊　定員　約15名

プログラム

10：00　祈り
10：45　講話1
12：00～12：45　昼食
12：45～　ゆるしの秘跡または短い面接
13：30～講話2
14：45～ミサ
15：30～茶話会

・　また空いている時間にゆるしの秘跡、短い面接を受けることができます。

申し込みは、下記住所へハガキかFAXで、氏名・住所・TELを記載の上、開催日の3日前まで必着のこと。なお、日比野教会で葬儀などある場合は中止となりますので、ご了承ください。

〒456-0062　名古屋市熱田区大宝4-5-17
カルメル会日比野修道院　一日静修係（担当松田浩一神父）
FAX052-671-1825　お問合せTEL052-671-1003

聖書深読センターのご案内

１　東　京・・・上野毛聖テレジア修道院（黙想）の案内をご覧下さい。
２　宇　治・・・宇治聖テレジア修道院（黙想）の案内をご覧下さい。

３　京　都・・・１１月１３日（土）　新井延和神父
　　１２月　９日（木）　奥村　豊神父
　場　所：河原町カトリック会館６階　　費　用：各回 2,500 円
　時　間：午前１０時～午後４時　　持参品：聖書・筆記用具・ノート
　申し込み・問い合わせ
　　〒604-8006　京都市中京区河原町通三条上ル
　　河原町カトリック会館内　聖書委員会
　　ＴＥＬ：075-211-3484　　ＦＡＸ：075-211-3910

４　名古屋・・・１１月6日（土）　　日比野カトリック教会　中川博道神父
　毎回、事前に名古屋教区ニュースでお知らせします。
　原則として、定員 21 名とし、申し込みはファックス、葉書でお願いします。
　コースは深読法を集中的に行う１日コースと、全行程を行う１泊２日コースがあります。
　対象は信徒、未信徒の別を問いません。キリストの教えに関心のある方でしたらどなたでもご参加下さい。
　　連絡先：〒465-0058　名古屋市名東区貴船 3-2115　小林 厚
　　TEL/FAX　052-701-3685

５　横　浜
　１泊２日コース
　11 月１７日（水）～１８日（木）　裾野修道院（裾野・桃園）　　奥村一郎師

　時間　一日目　13 時 30 分～2日目　16 時まで
　なお上記のように 11 月のコースは日付け・場所が変わりました。

　連絡責任者　　蜜本昌俊　TEL・FAX　045-621-5838

お知らせ

通信深読について

通信深読は、現在何箇所かで行われているようです。そのうち２箇所が新たに参加可能なので、紹介します。

1　朝日カルチャーセンターの通信講座

参加者は、「個人素読」（記号、全、所感、近況報告などを書くＢ５用紙）を提出。講師のコメントが記入されて返送される。参加者全員の「個人素読」と「素読表」そして解読が冊子になって送られる。

費用：６ヶ月 17,900 円（４、７、10、１月に納入）　継続の場合は 15,950 円

講師：九里彰師（奇数月）　新井延和師（偶数月）

問い合わせ：〒163-0278　東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル

私書箱 21 号　朝日カルチャーセンター通信講座部

電話 03-3344-2527（直通）

2　有光信子

参加者は「素読表」（B5 あるいはその半分に、記号、全、及び思いを書く。書式は自由）を送る。全員の素読表がコピーされて参加者の手元に戻る。特に指導者のようなものはいないので、コメントや解読はない。

費用：１回 300 円　　年 10 回 3,000 円

送り先：〒663-8033　西宮市高木東町 31-20-505　　有光信子

ＴＥＬ／ＦＡＸ　0798-67-8132

3　ミニ深読

グループで２、３時間かけて聖書深読法の一部分を行います。

聖書深読黙想会に参加経験のある方に限ります。

遠方に、参加希望者が多数いる場合には、有光、またはＳｒベアトリス指導に行くことも可能です。

問い合わせは「聖書深読センター」事務局　Ｓｒベアトリスまでご連絡下さい。

◎　聖書深読に関してご質問のある方は、下記聖書深読センターにお問い合わせ下さい。

聖書深読センター

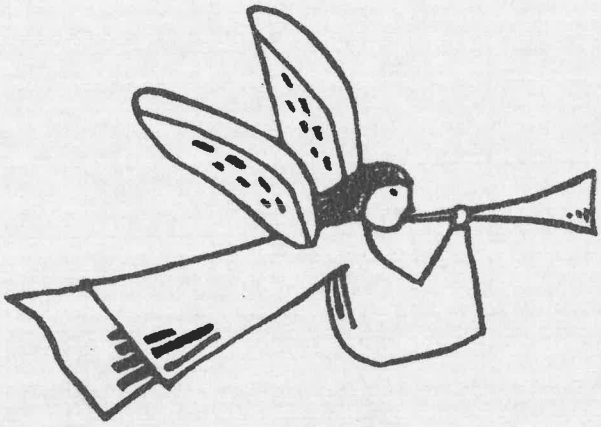
〒611-0002　京都府宇治市木幡御蔵山 39-12 カルメル会聖テレジア修道院（黙想）

所長：奥村一郎神父　　事務局長：新井延和神父　　連絡先：Ｓｒベアトリス

ＴＥＬ　0774-32-7016　　ＦＡＸ　0774-38-2543

Ｅメール　carmis@mbox.kyoto-inet.or.jp

諸所の企画案内



聖パウロ女子修道会
ＣＷＣ．（キリスト者婦人の集い）
真命山霊性交流センター
リーゼンフーバ講座
三位一体の聖体宣教女会
マリアのみ心会
心のいほり
風の家
聖心会の黙想の家
スズランハウス
ノートルダムル・ド・ヴィ

諸所の企画紹介

＊　一日黙想会

―― キリストとの出会いを求めて ――

深まりゆく秋のひととき、キリストとの出会いを求め、
聖書のみことばに導かれて祈りましょう。

日時：　１１月１３日（土）１０：００～１６：００
対象：　３０歳までの未婚の女性信徒、求道者
参加費：　１５００円（昼食を含む）　聖書、筆記用具をご持参下さい。
場所：　東京・上野毛カルメル修道院
〒158-0093 東京都世田谷区上野毛 2-14-25　TEL.03-5706-7355
申込み先：聖パウロ女子修道会　シスター菊池
〒107-0052　東京都港区赤坂　8-12-42
TEL.０３－３４７９－３９４１　FAX.０３－３４７９－５１９８
E-mail: sanpaoline@pauline.or.jp
スタッフ：　聖パウロ女子修道会　シスター

＊　ＣＷＣ　（キリスト者婦人の集い）　講師：九里　彰　神父（カルメル会）

テーマ：聖書に登場する女性の霊性
日程　：２００４，　１２／１４（火）
時間：午前１０：３０～１２：００
会場：真生会館第一会議室

これまでのテーマは「アブラハムの２人の妻」「マルタとマリア」「ベタニアの女」「サマリアの女」「マリアの受胎告知」でした。

＊　真命山　の　霊性　　〒865-0133　熊本県玉名郡菊水町蜻浦１３９１－７
真命山諸宗教対話・霊性交流センター
申し込み：TEL.0968-85-3200;Fax.0968-85-3186
e-mail:shinmeizan@chive.ocn.ne.jp

２００４年度
祈りの集い：テーマ・聖人の祈りに学ぶ
１１／１１（木）　福者三位一体のエリザベット
１２／９　（木）　十字架の聖ヨハネ

＊＊＊：尚、個人、グループで黙想会、研究会などできますので、ご相談下さい。宿泊は１０名ぐらい迄可能です。

＊　リーゼンフーバー講座・研究会案内

キリスト教：金曜日１８時４５分～２０時３０分　聖イグナチオ教会信徒会館
入門講座：アルペホール。どなたでも聖書に基づきキリスト教の基本
テーマを致します。

キリスト教：毎月第一・第二火曜日１８時４０分～２０時３０分
理解講座：聖イグナチオ教会アルペホール。キリスト教の基礎知識
のある方。（２年間コース）信仰理解と信仰生活の深まり
を目的としキリスト教の中心テーマを探求

聖書研究会：木曜日１２時４０分～１３時２５分上智大学７号館３１６号研究
室、学生のどなたでも。新約聖書を１章づつ読んで話し合います

座禅会：月曜日　17時20分～20時10分　＊　木曜日18時20分～20時30分
どなたでもどうぞ。初心者歓迎、遅刻、不定期の参加可。
接心　：2004.10/29（金)20:30～11/3日（水)14 時　秋川神冥窟（一泊2400）
2005.2/26　(土)8:30　～27日（日）16時　上石神井　（5400）
5/29　(土)13:～30日（日）16時　　宝塚市
7/31　(土)17:30～8/6(金）13時

黙　想：毎月第２．第４火曜日18:45 － 20:00：　イグナチオ聖マリア聖堂
水曜日 18:00～18:30 ：　上智大学内クルトゥルハイム一階右
小聖堂　　どなたでも
祈りの集い：下記土曜日 13:30～16:00　場　所：S.J.ハウス第５会議室
講話、黙想、ミサがあります。
11/13.12/11.　＊ 2005.1/8.2/19.3/19
黙想会：　11/27.(土）10:00 ～11/28 日（日）15:00　（１泊4400円）

アガペ会：　説明会と集い・下記の日　１３時３０分～（20代～40代の信者）
＊２００５：１／２２　（ 土）：Ｓ．Ｊ．ハウス第５会議室

クリスマス会：12/18　(土）16：30～上智会館５階第６会議室　要申し込み
12/23　(火）14:00 ～上智大学内クルトゥルハイム聖堂

会社帰りの黙想：毎月第２．第４火曜日　１８：４５～２０：００
聖イグナチオ教会マリア聖堂（中聖堂）
＊　以上、問い合わせ・連絡先　：クラウス・リーゼンフーバー神父
〒102-8571東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学 S.J. ハウス
直通電話 03-3238-5124 、 5111(伝言)、FAX,03-3238-5056

＊　三位一体の聖体宣教女会　東京修道院

場所：〒189-0003東村山市久米川町1-17-5

TEL.042-393-3181 FAX 042-393-2407

黙想会：２００４年～２００５年

「聖書で祈る」：　指導：雨宮　慧師（東京教区司祭）対象：一般信徒

１１月２７日（土）５：３０～２８日（日）４：００

２００５．２月２６日（土）５：３０～２７（日）４：００

祈りの集い：神が下さる私の道　指導：星野正道師（司祭）

対象：男女青年信徒

＊＊＊　１１月２７日（日）を　１１月１９日（土）に変更

時間：１０：００～４：００

２００５．２月８日（土）１０：００～４：００

黙想会：指導：星野正道師　（司祭）　＊対象：一般信徒（お弁当持参）

１１月１９日（金）１０：００～４：００×

２００５．２月４日（金）１０：００～４：００

＊＊＊＊＊＊＊

キリスト教講座　カトリックの教えを学びたい方

日時：毎週木曜日　10:00am ～11:30am

十字架の使徒職の集い　　＊対象：信徒

洗礼よる司祭職に生き、司祭のために祈る

期日：第１グループ　　毎月第２金曜日(2:00Pm.～3:30Pm.)

第２グループ　　毎月第１木曜日(2:00Pm.～3:30Pm.)

両グループ＊司祭のために聖体礼拝を捧げます（1:30Pm～200Pm)

＊マリアの御心会

場　所：〒160-0012　東京都新宿区南元町６－２

ＪＲ信濃町駅下車徒歩２分

問い合わせ・申し込み：TLE.03-3351-0297　：FAX.03-3353-8089

E-mail midorif@jpc.apc-org

「来て・見なさい」　結婚・修道生活・独身生活を選定したい方。

２００４年度	（テーマ）	指導者
１１／２８（日）	霊の識別	ティエリ・ｊ・ロボアム師
１２／１９（日）	星に導かれて	ジャン・クロード・ホレリッヒ師
２００５年度		
１／２３（日）	聖体に現存するキリスト	森一弘司教
２／２０（日）	わたしの内に、巣くう社会の歪み	下川雅嗣師
３／２０（日）	毎日の生活の中に神を探す	加藤信也師

＊　『心のいほり』
内観瞑想センター』代表　藤原直達神父　（大阪教区司祭）
〒５７２－０００１　大阪府寝屋川成田東町３－２７
TEL/FAX ０７２－８０２－５０２６　携帯　０９０－２４０１－９３７４
活動内容。定期的に各地で内観黙想の同行指導と講演。日本的な瞑想法と、自己発見、癒しの方法としての内観瞑想の普及。同行司祭は藤原神父です。
希望者は手紙かファックスで問い合わせてください。
電話では取り次いでおりません。

２００４年度
１１／７（日）２時～１１／１３（土）２時まで　６泊７日　京都・竜安寺
１１／２４（水）２時～１１／３０（火）２時まで６泊７日　横浜・戸塚
１２／１２（日）２時～１２／１８（土）２時まで６泊７日　兵庫宝塚売布

２００５年度
１／１０（月）２時～１／１６（日）２時まで６泊７日　横浜・戸塚
２／７　（月）２時～２／１３（日）２時まで６泊７日　兵庫宝塚売布
２／２０（日）２時～２／２６（土）２時まで６泊７日札幌厚別ベネディクト
３／６　（日）２時～３／１２（土）２時まで６泊７日　横浜・戸塚

＊　風　の　家　井上洋治神父　（東京教区司祭）
〒１６９－００４２　新宿区西早稲田３－１７－２３－９０３
TEL:０３－３２０４－４４５３
山根道公　機関誌　『風』　編集者
〒７００－０８０８　岡山市大和町１－１１－１７
TEL:FAX ０８６－２２７－５６６５

＊　スズランハウス　責任者・井口貴志
〒192-0041八王子市中野上町4-27-4・TEL.0426-28-3222
アルコール依存症、やせ症、摂食障害者とその家族のための施設。

聖心会裾野修道院　ヴィラ・フジ（黙想の家）

〒411－1126　静岡県裾野市桃園198

TEL: 055-992-2120　FAX:055-992-2165

聖書による個人指導黙想会

2005年1月26日（水）－2月4日（金）

ヘルパー：松本秀友師（京都教区）、Srs.　吹田真佐子、長谷川和子

申込先：〒108－0072　東京都港区白金4－11－1

聖心会レターレ修道院　Sr.吹田　真佐子

Tel:03-3446-1270　Fax:03-3441-0454

〒455－0872　名古屋師港区西蟹田1833

聖心会名古屋修道院　Sr. 長谷川　和子

Tel:052-302-4385　Fax: 052-309-1670

一般黙想会

テーマ：「自分探し」（2回とも参加できる方）

講師：近藤雅広神父（心のともしび運動）

① 2004年11月1日（月）午後1時より

11月3日（水）午後2時まで

② 2005年4月14日（木）午後1時より

4月16日（土）午後2時まで

参考：「私は誰ですか」（近藤雅広著　天使院刊）にもとづく講話形式の黙想会

申込先：Sr．長谷川　和子　（上記の連絡先）

いのちの泉へ

すべての人のための祈りの集い

カルメルの霊性に学びつつ、キリスト者としての霊性を養うための講話と
沈黙の祈りで構成された集いです。
カルメルの霊性を、より深めたい方のグループと、
若い方、基礎的な信仰を学びたい方のグループがあります。

2004年後期

10月23日（土）　*祈り　－　泉への道*

11月27日（土）　*死　－　神との出会い*

12月18日（土）　*幼な子の道　－　無の道*

講話：伊従信子・片山はるひ　（ノートルダム・ド・ヴィ会員）

午後2時より　講話　祈り　分かち合い　ミサ（翌・日曜日の典礼）

参加費：200円

場所：ノートルダム・ド・ヴィ

〒177-0044　練馬区上石神井４－３２－３５

（西部新宿線　武蔵関駅北口から徒歩10分、 もしくは、上石神井駅北口から徒歩15分）

問い合わせ・申し込み：
Tel (03) 3594-2247　（電話は夕方6時から夜9時の間にお願いします）
Fax (03) 3594-2254　（Fax送信は何時でも結構です）
または郵便で、祈りの集い係りまで。

マリー・エウジェンヌ神父
（ノートルダム・ド・ヴィ 創立者）

カルメル会の霊性を受け継ぐ
ノートルダム・ド・ヴィ（いのちの聖母会）は、
現代社会のあらゆる場で社会人として働きながら、
神への全き奉献を通して、祈りと活動の一致を
生きることを、その精神・理想としています。

カルメル会の出版物のご案内

雑誌「カルメル」2004年特集号

「本質的なことからの再出発」

福音の本質的なこと　－現代日本の文脈の中で　…中川博通
現代日本におけるキリスト者の本質とは何か
－キリストの弟子として生きる　…松田浩一
共同体の本質　－過ぎ行く時の試練の中で残ってゆくもの　…大瀬高司
奉献生活の本質　－愛の証しとしての奉献生活　…九里　彰
カルメルの本質　－観想と神　…新井延和

雑誌「カルメル」No.314（2004年秋号）

「今日の霊性」

祈り（8）…チプリアノ・ボンタッキョ
十字架の聖ヨハネのとらえた「自由と解放」（3）　…九里　彰
カルメルの馨り（1）　－カルメル日本宣教の根底史（1562－1951）　…大瀬高司
イエズス　私の最愛のお方　思い出してください(12)　…ペトロ・アロイジオ
幼きイエスのマリー・エウジェンヌ師(6)…伊従信子
神の訪れ、喜びの輪の誕生　…高橋重幸
三位一体のエリザベット(7)　－愛に生きる…伊従信子
巡礼者　－心の旅　…ユージン・マッカーフリー
ガラスの心と柔らかな心と　…森　みさ
出会い－修道生活きのうきょう－(8)…奥村一郎

＊年５冊（春夏秋冬号＋特集号）会員頒布価格：3000円（送料込み）
郵便振替：００１９０－４－１９５４５７
跣足カルメル修道会
（どなたでもご購入できます。電話でのご連絡は、事務担当竹田：℡03（5706）8356迄。）

「カリットへの旅　－カルメル会の歴史」
P・T・ロアバック著、女子カルメル会訳、男子カルメル会監修、
2003年、サンパウロ、定価（本体2500円＋税）。

「十字架の聖ヨハネ詩集」
ルシアン・マリー編集、西宮女子カルメル会訳注、2003年、新世社、定価（本体2000円＋税）。

お　願　い

投稿くださるときには、次のようにしていただけると幸いです。

1．締め切り　毎月１０日まで
2．原稿サイズ：B5　左右の余白：最低１５mm
3．「心の泉」のコーナーについては、
　随想、こぼれ話、書評等。「断想」、「陽あたり」等、小題をつけて。
4．「諸所の企画」のコーナーについては、
　①主催するグループ名もしくは個人名を明記。
　②活動内容。例えば、「黙想会」、「祈りの集い」等。
　③月間、あるいは年間の具体的計画。連絡先等。
5．原稿が長い場合、編集段階で選択したり、数回に分けて掲載させていただくことがあります。また紙面の都合上、全体を打ち直し、詰めさせていただくこともあります。あらかじめご了承ください。
6．寄稿連絡は、九里（くのり）　彰神父宛にお願いいたします。
　〒158-0093　世田谷区上野毛 2-14-25　カルメル会修道院
　Tel(03)3704-2171　Fax(03)3704-1764
　E-mail での寄稿も受け付けます。seminary@carmel-monastery.jp
7．次号から「読者の声」の欄を設けたいと思います。日頃感じていること、また本誌に対するご意見や感想などを、100 字～400 字以内にまとめ、お寄せ下さい。
8．「霊性センター・ニュース」への献金の窓口が変わりました。ご注意下さい！
　郵便口座番号：00110-4-297250　加入者名：　カルメル霊性センターニュース
　通信欄に、「霊性センターニュースへの献金」とご記入下さい。
　振込用紙が必要な方は、ご請求下さい。

「霊性センターニュース」をご希望の方は、下記まで郵送ご希望の月数分×220 円切手または現金を送ってください。これには、封筒代が含まれています。献金の場合は、上記の口座へお振込み下さい。
佐々木茂子　〒 230-0074　横浜市鶴見区北寺尾 4-21-11
Tel (045) 575-5722

編集後記

晩年に受洗された或る 80 代の男性の信者さんから、こう言われたことがある。「キリストさんは、隣人を愛せよとか、互いに愛せよとかおっしゃるが、人間以外のものはどうなるのか。生きとし生けるもの、ぼうふらだって神さまは愛しておられるのではないか。人間の勝手で一方的に殺してもよいのか」。

犬や猫のお葬式お墓がある日本ならでの発言だが、考えさせられる。西欧のキリスト教は、余りにも人間中心的になってしまったのではなかろうか。そのよい面は評価しなくてはならないが、人間以外の生きものや自然の物、人工の物に対するまなざしは、神の愛のまなざしと一致するのであろうか。創世記には、この世のものが創造されるたびに、こう記されている。「神はこれを見て、良しとされた」。　(P.九里)

REGINA
DECOR
CARMELI